

チャーサーの *The Book of the Duchess* に おける “Dreamer” の愛の認識について*

西 田 栄 毅

I

この詩を構成している内容は、大別すると三部分に分けられる。一つは語り手自身の状況に関する記述、その次はケユクスとアルキュオネーの物語の要約、最後は黒衣の騎士と語り手の対話。この三部分に共通していることが一つある。それは、語り手もアルキュオネーも黒衣の騎士もそれぞれ愛する人に去られた、あるいは、愛する人を失った悲哀と苦悩を味わっているという点である。しかし、同じように精神的、肉体的に苦しみながら、三者が最終的に選択した態度は、それぞれ異なっている。この試論では、その相違点に着目しつつ、“dreamer” の愛の認識の跡を辿ってみる。

I have gret wonder, be this lyght,
How that I lyve, for day ne nyght
I may nat slepe wel nygh noght.¹⁾

彼がこのような不眠に苦しむ原因となったのは、曖昧な言い方はしているが、八年前に罹った病気のためである。この病気が恋の病であることは、“there is phisicien but oon/That may me hel” (39-40) という記述から十分に判断できる²⁾。

* 本稿は、日本英文学会第33回九州支部大会（昭和55年10月25日、於鹿児島大学）における研究発表にもとづく。

語り手の状況に関する冒頭の四十行の記述は、後のアルキュオネーや騎士との関係を考える上でも重要である。語り手自身の説明からわかることは、彼が精神的には去った愛人への思慕の念を断ち難く、苦悩し、肉体的には不眠症のために死の危機に曝されるという、かなり異常——語り手自身のことばを借りれば“*agaynes kynde*”——な状態にあることである。しかも、このような状態が招来する悲劇的な結末だけは回避するため、生への意志を必死に保持しようとしている彼の姿が認められる。それは、彼が自己の限界状況をよく認識しており、そこからの脱出を模索していることを意味する。そのことは、彼が眠られぬ夜を過ごすために、一冊の“*romaunce*”を手にとることからも、容易に推測できる。更に、“*For me thoughte it beter play/Then play either at ches or tables.*” (50-51) と述べていることを考慮にいれるならば、彼が自分の苦悩に対して、決して自暴自棄にならず、真摯かつ冷静な態度で臨んでいることは明らかであろう。

II

彼が手にしたその“*romaunce*”の中に、ケユクスとアルキュオネーの物語が含まれていた。ケユクスとアルキュオネーは深い愛情によって結ばれた夫婦であったが、ある日、ケユクスは船に乗り、旅に出る。ところが、その船が激しい嵐に遭い、ケユクスをはじめとして乗組員は皆海の藻屑と消えてしまう。一方、家に一人残されたアルキュオネーは、夫の帰りを長い間待ち侘びていたが、あまりに遅いので不安を募らせ、四方に人を派遣して夫の行方を探させるが、何の手懸りも得られない。チャーサーは彼女の嘆きを緊迫した筆致で描いている³⁾。しかし、この物語の要約の中で、量的に最も高い比率を占めているのは、眠りの神モルフェウスに関する描写の部分である。これは、不眠に苦しんでいる語り手の関心が、モルフェウスにあることを示していると考えられる。彼自身が直接にこのことは述べているし、また、物語を読んだ後、アルキュオネーと同じように、モルフェウスやジュノーあるいは彼に眠りを与えてくれる者に

対して、祈りを捧げることからも明らかである。そして、彼もまたその祈りのすぐ後に、アルキュオネーと全く同じく、突然に眠りに陥り、しかもその眠りの中で夢を見る。この設定は、筋の展開のうえから言っても無理がなく、自然であると思われる。

しかし、表面的には展開上の妥当性はそれで納得できるとしても、語り手自身の内面の問題が残る。彼がアルキュオネーの悼ましい精神状態を知って、無関心でおれた筈はない。そうした語り手の気持を推測する手懸りは、以下のような記述から得られる。

Such sorowe this lady to her tok
That trewly I, which made this book,
Had such pittee and such rowthe
To rede hir sorwe, that, by my trowthe,
I ferde the worse al the morwe
Aftir, to thenken on hir sorwe.⁴⁾

これに関して、Winny は、“an appropriately courtly remark response to a pathetic tale, but not a remark to treat seriously” と述べている⁵⁾。この言葉は、しかし、語り手の眠りに入る前の心的状態、換言すれば、ケユクスとアルキュオネーの物語から受けた彼の心的変化、を知るうえで最も重要なものである。彼の心的変化を問題にする理由は、眠る前と後では明らかに、彼の心的状態に変化が見られるからである。しかも、その変化をもたらししたのは、不眠を紛らすために読んだケユクスとアルキュオネーの物語以外に考えられない。

上記の引用句からわかることは、アルキュオネーの悲しみに対して、かなり強い憐愍の情を語り手自身が抱いたということである。これより、アルキュオネーの悲しみと苦しみが、彼自身の過去の苦い経験を新たに蘇らせたことは、推測するに難くない。一般的に考えれば、彼のように失恋の悲哀を味わってい

る者が、このような物語を読めば、心が揺き乱され、ますます不眠症の昂ずるのが自然であろう。したがって、彼がこの物語を読み終えた直後に睡魔に襲われるというのは、聊か納得しかねる。しかも、その突然の睡魔の原因は、先にも見たとおり、モルフェウスやジュノー等への祈りの結果によるかのごとく、チャーサーは述べている。しかし、彼の祈り自体が安堵感を含んでいることを考慮にいれるならば、到底顔面どおりには受け取ることはいできない。読後に生じた語り手の心の中のある変化を、チャーサーはこのような間接的な表現で示しているのではないだろうか。それは、恐らく、チャーサー特有の暗示的な、一種の屈折表現と言えるかもしれない。読者あるいは聴衆が当然期待する、語り手の内面の変化の告白を、直接に叙述するのは避けて、筋の展開が破綻をきたさない程度の表面上論理的連続性をもった、陳腐な表現のオブラートで包んでいる。

このような考えに従えば、以下の詩句も別様の解釈が可能である。

My first matere I will yow telle,
 Wherefore I have told this thyng
 Of Alcione and Seys the kyng.⁶⁾

“My first matere”は、直接的にはケユクスとアルキュオネーを読んだ結果、“goddess that koude make/Men to sleep, ...for to wake” (235-36)を知り、それらへの祈りが功を奏して眠ることができた事実を指すものと思われる。しかし、物語を読む前は、語り手は恋の痛手のために不眠症に罹り、精神的にも肉体的にも危機に陥り、死の不安の中におかれていたのである。その彼が、“in my game”すなわち“戯れに”眠りの神に祈りをできるまでに、心のゆとりができたということは、彼自身が死の恐怖から免れたこと、あるいは少なくとも死にたいという気持を放棄したことを意味すると考えられる。死の不安からの解放は、語り手が新たな認識の段階に到ったことを示している。すなわち、彼の精神が精神として機能しうる限界のところで、彼は死ではなく、生の方向へ

の選択をなしたのであると言える。それは、ケユクスによってアルキュオネーにも提示せられながら、彼女が選べなかったものである。しかし、語り手のこの選択は、妥協とか逃避とかいうことばによって非難されるべきものではない。死に直面した精神が自己の破滅の危機の中で行った選択は、それ自体意味のあるものである。少なくともチョーサーは非難の言辞を吐いてはいない。語り手と類似した状況の中で、死によってその愛を完うしたアルキュオネーの精神と対峙することにより、彼自身の活路を見出したと言える。これが、チョーサーがケユクスとアルキュオネーの物語を叙述したもう一つの理由である、と考えられる。

III

眠りの中で眼覚めた語り手は、“dreamer”として素晴らしい情景を眼にする。時は五月の夜明け頃。彼の寝室の屋根やレンガの上に止まって、妙なるメロディーの歌を、これまたみごとにハーモニーで歌う小鳥の群れ。部屋の中は一面絵画で充ち、窓という窓は一枚の破損とてなく透きとおり、しかも、トロイの物語の全てがその上に描かれている。壁には薔薇物語。閉められた窓からは、硝子を貫けて明るい日の光が彼のベッドの上に射し込んでいる。空は雲一つなく晴れあがり、眼に染みるような青空が覗いている。気候は寒くもなく暑くもなく、全く穏やか。

獵師の雄鹿狩りの角笛や人・馬・獵犬などのあちこち動き回る音を聞き始め、“dreamer”はベッドを飛び出し、外に出る⁷⁾。そして、自分の馬を駆って一気に野原へと向かう。そこで大勢の獵師や木樵が換え犬を連れて待機しているに出くわし、彼らと共に森へと急ぐ。その雄鹿狩りが失敗に終わったのを見届けると、独りで歩き出す。すると、子犬が一匹現われて、彼に戯れつく。その子犬を捕まえようと跡を追いかけるうちに、花が咲き乱れ、青々とした緑に覆われた小道へと出る。そこはまだ誰も足を踏み入れたことがないように思われた。

For both Flora and Zephirus,
 They two that make floures growe,
 Had mad her dwellynge ther....⁸⁾

この後更に森と動物の描写が続く。

以上が“dreamer”が黒衣の騎士と出会うまでの夢の序部である。これはチャョーサーが実際に見た夢を記述したものか、創作なのかはわからない。しかし、確かに Kittredge の言うように、夢の非合理性、非現実性の特徴がある⁹⁾。ただ、チャョーサーは、夢の非現実的な側面を描くために、“singing-birds”や花や木々や獣や気候——“nother to cold nor hot”——など、伝統的な来世描写の要素を使用しているようだ¹⁰⁾。だが、その寓意まで含んでいるかどうかという点になると、甚だ疑問が残る。

しかし、ここの記述で注目すべき点は、そうした非現実的・非合理的あるいは現実的な細部描写が醸し出す、“earthly paradise”のような雰囲気である。ここでは、動物も植物も生きとし生けるものが、冬の寒さや苦しみを免れて、それぞれの生を存分に堪能し、謳歌している。“dreamer”もまた、ここでは眠る前とは別人のように潑刺としている。したがって、この場面は、“dreamer”が“agaynes kynde”な状態から脱し、“the lawe of kinde”に則った精神状態に戻ったことを象徴していると考えられる。

“dreamer”は、次に森の木の下で、悲しみに打ち拉がれた黒衣の騎士を見つけ、後方から近付く。その時、彼は、黒衣の騎士が彼の“lady”を亡くした悲しみを、メロディーも節もつけずに歌うのを耳にする。

I have of sorwe so gret won
 That joye gete I never non,
 Now that I see my lady bryght,
 Which I have loved with al my myght,
 Is fro me ded and ys agoon.

Allas, deth, what ayleth the,
That thou noldest have taken me,
Whan thou toke my lady swete,
That was so fair, so fresh, so fre,
So good, that men may wel se
Of al goodnesse she had no mete!¹¹⁾

これは、この後の“dreamer”の態度との関連において、これまで数多くの研究者達の論議の的となってきた箇所である¹²⁾。その問題の焦点は、最初の出会いの時点で、黒衣の騎士の“lady”が死んだ事実を知りながら、どうして“dreamer”はその後執拗に騎士に対して、何も知らない者のように質問するのか、ということである。この問題を複雑にしている原因は、恐らく、“dreamer”とチョーサー及び黒衣の騎士と John of Gaunt との関連、あるいは、作品とチョーサーの現実の生活との関連に固執している点にあると思われる。したがって、ここではこのような関連性に拘泥しないで、別の角度から考察を試みたい。すなわち、語り手すなわち“dreamer”の愛の認識過程の表現として、この詩を理解してゆく。そうすれば、“dreamer”と騎士との出会いは、語り手自身が新たな愛の問題を思索する段階に入ったことを示している、と考えられる。このような解釈が可能であることは、夢見る者は、夢の中の登場人物としての自分自身の考えを理解し、かつその行動を見ることができるという、夢の特性を考えれば明らかであろう。以上の理由により、“dreamer”が立ち聞いた騎士の歌は、問題提起の役割を果たしていると考えることができる。

IV

その騎士の歌を聴いた後、“dreamer”の存在に気付いた騎士に挨拶をして、悲しみの慰撫を申し出る。この申し出に対して、騎士はそれが不可能であることを悟らせるために、“dreamer”に苦悩と悲哀に苛まれる、絶望的な心境を披

瀝する。その例証として、シーシュポスやタンタルスをあげる。そして、そういう状態に陥った理由を、運命の女神とのチェスのゲームの比喩を用いて説明する。それは、最初は術策を弄して、彼の“fers”を奪った運命の女神に対する呪詛の様相を呈している¹³⁾。ところが、ひとしきり運命の女神の不実と気紛れを嘆いた後で、以下のようなことばを口にする。

Myself I wolde have do the same,
Before God, hadde I ben as she;
She oghte the more excused be.¹⁴⁾

Cherniss はこの点に関し、*De Consolatione Philosophiae* との関連に着目して、

These observations of the Knight correspond to
Philosophy's suggestion that Boethius has within
his own mind the knowledge of Fortune and God's
universe necessary to effect his own cure (I, pr. 5, 6).¹⁵⁾

と述べている。しかし、それと同時に、騎士が彼自身の運命を甘受しようとする考えがあることを示している。そして、その運命甘受の覚悟の末の結論は、“hyt ys to deye soone.” (690) しかし、彼のこの結論はまだ決定的ではない。死を決意して直ちにそれを実行に移せば、彼も苦悩しなくて済んだであろう。彼の苦悩の原因は、自らの愛を貫くためには、先に逝った愛しい人に殉ずることが、彼に残された道だとは思いつつも、死にきれないところにあると言える。その揺れ動く心を彼は次のように述べる。

For nothyng I leve hyt noght,
But lyve and deye ryght in this thought.¹⁶⁾

騎士のこのような絶望的な苦悩を聞かされた “dreamer” は、先ず彼の死の決意を翻えそうと説得を試みる。運命の女神の力を否定するため、ソクラテスを引き合いに出し、次に、愛のために死んだ者たち——メディア、フィリス、ダイドー、エコー及びサムソン——の名前を列挙して、もし彼が自殺したら非難を受けることになることと諭す。この例証からも、既に “dreamer” は騎士が愛の苦悩者であることを承知していると判断できる。また、彼が愛の苦悩の経験者であることを考えれば、このような例証をもって騎士を諭すのも当然と言えるよう。

“dreamer” に促されて、騎士は愛がどんなものか臆気に理解できる年頃から、愛の従僕となったこと、“goode faire White” との出会い、彼女の美しさ、彼女に対する慕情、愛の告白の不安と喜び、二人の幸福な生活の日々等を滔々と語り出す。この件の騎士の話しに関して、C. S. Lewis は以下のような見解を明らかにしている。

Not because the poem is a bad elegy, but because it
is a good one, the black background of death is always
disappearing behind these iridescent shapes of satisfied
love....¹⁷⁾

しかし、この見解には同意しかねる。なぜなら、楽しく、幸福であった過去の想い出が強ければ強いだけ、現在の悲惨な状態が恨めしく思われ、運命への悲憤も募るはずだからである。騎士の不幸もそこにあると考えられる。ボエティウスの “in alle adversites of fortune the moost unseely kynde of contrarious fortune is to han been weleful.”¹⁸⁾ ということだが、最も端的に彼の不幸の性質を説明しているように思われる。

V

騎士の話しが提示していることは、愛もまた運命の女神の贈り物の一つにす

ぎないということだと言える。したがって、もしジョーサーの意図が、宗教的なモラル乃至は少なくともボエティウスのような、神を志向する愛を描くことにあったとしたら、“dreamer”はもっと積極的な態度で、騎士を運命の車輪から解放するための手段を講じたであろう。しかし、“dreamer”は騎士の話が進行しても、そういう伝統的、宗教的なモラルは説かない。騎士の圧倒するような話しぶりに比して、彼が時々挟む間の手は、こういう場合に誰もが言いそうな平凡なものである。平凡で単純ではあるけれども、なかには核心を突いた、鋭いものがある。それは、彼が冷静に騎士の話しを聞いていることを示しているし、かつ、騎士が彼自身ともまたアルキュオネーとも異なった選択をなしていることに気付き始めたことをも示している。それを最も明確に表わしているのは、彼の次のようなことばである。

“Now, by my trouthe, sir!” quod I,
 “Me thynketh ye have such a chaunce
 As shryfte wythoute repentaunce.”¹⁹⁾

この時点では、もはや彼には騎士を慰めようという意志が殆どないと言ってよい。いや、より正確には、彼自身が騎士から別の愛のあり方を学んでいると言ふべきであろう。騎士の選択とは一体どんなものなのだろうか。その答えは、“dreamer”の上記の意見に応じた彼のことばの中に見出される。

“Repentaunce! nay, fy!” quod he,
 “Shulde y now repente me
 To love? Nay, certes, than were I wel
 Wers than was Achitofel,
 Or Anthenor, so have I joye,
 The traytor that betrayed Troye,
 Or the false Genelloun,
 He that purchased the tresoun

Of Rowland and of Olyver.

Nay, while I am alyve her,

I nyl foryete hir never moo.”²⁰⁾

これは、騎士が死を望みつつも死に到ることができず、しかも亡き “goode faire White” への愛を断念乃至は諦念することもできず、死にも勝る苦しみの中で、彼女への愛を保持しようとしていることの表明である。この世において、愛する対象を失くした愛——死者への愛——が持続しうるかどうかは、かなり難しい問題である。死者への愛を貫き通すということは、果てのない不毛の荒野を独りで歩き続けるようなものであり、強靱な自己否定の意志を必要とする。なぜなら、その愛は死をもってしか完結されえないからである²¹⁾。潤沢と豊饒を喪失した、苦渋と不毛だけの愛は、異常な存在であり、正しく “agaynes kynde” である。そして、これは語り手自身が回避した、もう一つの選択の道でもあった。だからこそ、“dreamer” は騎士に対して彼の喪失したものが何であるかを尋かなければならなかったのである。彼自身が回避した選択であるが故に、騎士自身の口から直接にそのことを聞かないうちは、信じ難かったのだと言えよう。

チョーサーは、この詩において、この世における最も純粋な形における愛の可能性の一つを描き出していると言えるのではあるまいか。しかも、それは決して宗教的なものへと昇華したり、ボエティウスのような深遠な思慮によって、不確実な運命を超克したりするものではない。いわば、それは凡人の愚鈍ではあるが真摯な態度を以て、運命の女神の支配の中で、悲哀と苦悩を味わいながら、なお保持し、貫きうる愛である。したがって、もし、この詩が公爵夫人ブランチの死を悼む、John of Gaunt の命により、彼を慰めるために書かれたとするならば、チョーサーは John of Gaunt に対して、慰めというよりは寧ろかなり苛酷な生き方の助言を与えたと言わなければならない。

Notes

- 1) *The Book of the Duchess*, 11. 1-3. チョーサーの作品の引用は全て ed. F. N. Robinson, *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (London: Oxford University Press, 1974). による。
- 2) Cf. Roger Sherman Loomis, "Chaucer's Eight Years' Sickness," *MLN*, 59 (1944), pp. 178-80.
- 3) *The Book of the Duchess*, 11. 90-94.
- 4) *Ibid.*, 11. 95-100.
- 5) James Winny, *Chaucer's Dream-Poems* (London: Chatto & Windus, 1973), p. 50.
- 6) *The Book of the Duchess*, 11. 218-20.
- 7) Cf. Joseph E. Grennen, "Hert-Huntyng in the *Book of the Duchess*," *MLQ*, 25 (1964), pp. 131-39.
- 8) *The Book of the Duchess*, 11. 402-4.
- 9) George Lyman Kittredge, *Chaucer and his Poetry* (1915; rpt. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1972), pp. 68-69.
- 10) Howard R. Patch, *The Other World According to Descriptions in Medieval Literature* (1950; rpt. New York: Octagon Books, 1970), pp. 30, 33, 36, 40, 41, 100, 107, 189, etc. See also the same author's paper, "Some Elements in Mediaeval Descriptions of the Otherworld," *PMLA*, 33 (1918), pp. 601-43.
- 11) *The Book of the Duchess*, 11. 475-86.
- 12) Cf. G.L. Kittredge, *op. cit.*; James R. Kreuzer, "The Dreamer in the *Book of the Duchess*," *PMLA*, 66 (1951), pp. 543-47.; Bertrand H. Bronson, "The *Book of the Duchess* Re-opened," *PMLA*, 67 (1952), pp. 863-81.; Donald C. Baker, "The Dreamer Again in *The Book of the Duchess*," *PMLA*, 70(1955), pp. 279-82.; Stephen Manning, "That Dreamer Once More," *PMLA*, 71 (1956), pp. 540-41.; John Lawlor, "The Pattern of Consolation in *The Book of the Duchess*," *Speculum*, 31 (1956), pp. 626-48.; W.H. French, "The Man in Black's Lyric," *JEGP*, 56(1957), pp. 231-41.; Georgia Ronan Crampton, "Transitions and Meaning in *The Book of the Duchess*," *JEGP*, 62 (1963), pp. 486-500.
- 13) Cf. Franklin D. Cooley, "Two Notes on the Chess Terms in *The Book of the Duchess*," *MLN*, 63 (1948), pp. 30-35.; W.H. French, "Medieval Chess and the *Book of the Duchess*," *MLN*, 64 (1949), pp. 261-64.; Bertrand H. Bronson, *op. cit.*; Beryl Rowland, "The Chess Problem in Chaucer's *Book of the Duchess*," *Anglia*, 80 (1962), pp. 384-89.
- 14) *The Book of the Duchess*, 11. 676-78.
- 15) Michael D. Cherniss, "The Boethian Dialogue in Chaucer's *Book of the Duchess*," *JEGP*, 68 (1969), p. 657.
- 16) *The Book of the Duchess*, 11. 691-92.
- 17) *The Allegory of Love: A Study in Medieval Tradition* (1936; first issued as a paperback, 1958; rpt. London, Oxford, and New York: Oxford University Press, 1975), p. 169.

- 18) *Boece*, II, pr. 4.
19) *The Book of the Duchess*, 11. 1112-14.
20) *Ibid.*, 11. 1115-25.
21) 騎士のこの状況は, *The Parliament of Fowls* における二つの門の片方に刻まれた碑文を想起させる—

“Thorgh me men gon,” than spak that other side,
“Unto the mortal strokes of the spere
Of which Disdayn and Daunger is the gyde,
Ther nevere tre shal fruyt ne leves bere.
This strem yow ledeth to the sorweful were.
There as the fish in prysoun is al drye;
Th’eschewing is only the remedye!”

(11. 134-40)